

尚美という女性が窓を眺めていた。数センチほどあろうかという分厚いガラスの縁には黒く厚いゴム状の樹脂が塗られており窓の先にある青く暗い空間を切り分けている。

尚美は窓の先の青い空間で泳ぐ魚達を暗い潜水艇の中から見つめていた。

突如、大きな魚が現れると小さな魚の魚群は散り散りになり、魚影は消えて無くなった。逃げ遅れた魚が大きな魚に腹を咥えられると、そのまま腹を食い破り動かなくなった小さな魚の一匹はまるでモノであるかのように海中を漂った。

その様子を見た尚美は急いで目を逸らした。ショッキングな出来事であった事には違いないが、腹を食い破られた魚を見るのが嫌だった訳ではない。焼いた魚を自ら箸で分けながら食べることもあれば、自ら魚を捌いた経験もあった。

だが、生きているものが何らかの事象によって命を落としてしまうという瞬間が尚美は見ることが出来ないのだった。当たり前のように生きていたものが突然死を得る事によってモノ同然の動かない身体へと変わってしまう事象を目の当たりにしてしまうと、恐怖によってこめかみから汗が流れ落ち、脈拍や呼吸が不安定になってしまうのだ。

尚美は死という事象に対して異常なまでの拒絶感や恐怖を示す体質だったが、それは彼女が産まれてきた時からそうだった訳ではない。

尚美が幼い頃、祖母が亡くなった。

病室に流れる心音センサーの空虚な音と、眠っているのとは少し違う、まるでよく出来た人形であるかのような形になって眠り続ける祖母の姿と自分の周囲を支配する悲しみに包まれた空気が病室の中で漂っていた。

それから日を跨いで葬儀が執り行われると、祖父を見送る為に喪服を着た大量の大人達に囲まれ、両親は人々の波に揉まれるように視界から流れていった。八畳程の畳の和室の奥に祖母を祀る為に簡易的に作られた祭壇が設置されると祭壇の中心に木製の棺が置かれ、その周囲を沢山の花が囲んだ。

暮らし慣れた尚美の自宅は一気に非日常の空気に包まれた。喪服を着た親戚一同が集まると八畳程あった部屋は一気に手狭になり、まだ背丈の小さな尚美はまるで黒い木々が生い茂る森の中に囲まれるような気持ちを感じた。

両親も親戚達の対応で慌たしかったので尚美は祖母が眠る棺を見つめていた。エバミングを終え、死化粧で整えられた祖母は花に囲まれながら眠っていた。

見た目こそただ眠っているだけのように見えたが、嗅いだ事のない薬剤の匂いが尚美の

鼻腔を刺激すると、祖母の身体はもはや人間ではなく何かの作り物なのではないかと尚美は考えたが、生前祖母に抱かれながら絵本の読み聞かせをよくしてくれた時の感触も覚えていた。

目の前で眠る祖母は間違いなく祖母本人なのだ。だが、祖母が目を覚ます事はもう無いであろうという事も分かっていた。

告別式も終わり、斎場へと皆が移動すると祖母の身体が棺から出され木屑の中へと落とされた。

黒服を着た尚美の親戚達は別れを惜しみながら棺に残った花を祖母の体めがけて落としていく様を目で見送ると、斎場の職員の言葉と共に祖母の身体は木屑とおが屑の中へと沈んでいった。

尚美はまだ幼かったが、木屑の中へと沈んでいった祖母の顔をもう二度と見ることはできないだろうと本能的に確信していた。そして、同時にある疑問が湧き出てきた。

生前、祖母が感じていた意識は果たして何処へ行ったのだろうか――。

木屑の中へと沈んでいった祖母の身体は有機的に処理され、骨を除き身体の殆どの部分は土に還る事になる。これまで、棺の中で眠る祖母は夢を見ているのだと思っていたが、目も耳も夢を感じる為の頭でさえもなくなって仕舞えば何かを感じることが出来なくなってしまう。

詩を得てから土に還るまでの過程で祖母が生前感じていた意識はどこへ行ったのだろうか、尚美はずっと考えていた。

尚美の向かいには、母親が臍脂色のソファに腰をかけながら項垂れていた。祖母を失ったという悲しみに耐えながら通夜から葬式まで四六時中來訪者の相手をする為寝る間も惜しんであちこちへと駆け回っていた母の顔は幽鬼のそれであった。

母を想えばそっとしてあげた方がいいのであろうと思ったが、幼い尚美の中から湧き出た疑問は尚美の身体をはち切れる寸前まで膨張を続けていた。

「お母さん、死んじゃったお婆ちゃんはどこへ行ったの？」

考えるより先に言葉が出た。でもきつとお空の上に行ったんだよという答えが返ってくるに違いないと言う確信もあった。読んだことのある絵本にそう書いてあったからだ。

「お婆ちゃんは今お骨になる為の準備をしているの」

「そうじゃなくて、お婆ちゃんが感じてた意識はどこへ行ったのかって聞いているの」

尚美がそう問答した瞬間、母はこれまで聞いた事のないかのような大きな溜め息をつき、腰を折り曲げ顔を床に向かって落とすと、虚な目をしたまま尚美にこう答えた。

「死んだら何も無いのよ。お婆ちゃんは何も感じる事はできない、これから、このずっと先も」

母とは思えないような鋭い言葉だった。その言葉を聞いた尚美は途端に全身から血の気が引いていくような感覚がし、次は自らの歯がカタカタと音を鳴らす音を聞いた。

何も無いとは一体どういう事なのだろうか、絵本で見た天国も地獄も無く死を得た先はただただ無機質な無と相対さねばならないのだろうか。

一体いつまで？身体が生き返る事はまず考えられない、でもそれじゃあ何十年も何億年経っても例えそれをずっとずっと繰り返したとしても終わりの無い無と向き合い続けなければならぬのだろうか？

尚美の首筋から冷や汗が垂れ落ちると顔面は一気に青白くなり、もはや立ってはいられない程の恐怖が尚美の身体を床へと押さえつけた。

やがて自分も祖母のように死んでしまう事はあるだろう。だが、その先は尚美が思ってた以上に冷酷な現実が待っているとは思ってもいなかった。

気が付けば尚美は想像を遙かに上回る恐怖が全身から吐出するようにぼろぼろと涙をこぼしながら周囲の大人達を困惑させる程の金切り声を上げた。

慌てて尚美の身体を抱き抱える母は尚美を安心させようと自らの胸部に尚美を押し当てて頭を撫でながら大丈夫と諭しても尚美の恐怖は収まる事は無かった。尚美の胸の中には母に対する恨みの感情は全く無かったが、底知れぬ死への恐怖が尚美の心の奥底に呪いのように染み付いてしまった日だった。

それから、尚美は死というキーワードに対して異常な拒絶反応を示すようになった。斎場で母に言われた冷酷な一言を否定したかったが、生憎尚美の周囲には主観的に死を経験した人物はおらず、皆が出す答えはそれぞれ違っていた。

宗教に関する情報媒体を読み漁ったり、臨死体験についての情報を調べて回っても一時的な気休めにしかならず、確たる証拠を示すものは何処にもない。しかしその間にも時間は流れ尚美の身体は次々と変化していく。

人間である以上、成長して老化していくことははや避けられないだろうと悟った直美は人間の身体で居る事が嫌になった。

生物としていつか死を迎えるより、機械のように悠久的に生きる存在になりたかった。その証として尚美の身体の至る所にチップやナノマシンが埋め込まれている。

突然、尚美の網膜に警告を示すアラートが入った。酸素中に有害物質が含まれる旨の警告が表示されており、尚美は眼球を下に向けて成分を表示させた。

有害物質の大部分はタールやニコチンであった、それにわずかに湿った葉がゆっくりと燃烧される時に出る独特な臭いが鼻につくと、おおよその正体は掴めていた。

尚美は正面に顔を向けると、向かいの席に紙巻きたばこを嗜む男が居た。四十代を迎えたばかりかの見た目にぼさぼさのロングヘア、そして無精髭。

服装こそジャケットとパンツスタイルでフォーマルな格好ではあったが、ひとたびカジュアルな服を着れば、町中の騒がしいパブで騒ぎながら酒をおおる中年男性のそれであつた。

それに尚美達が乗っている潜水艇の随所に禁煙のマークが書かれているのにも関わらず男は平気な顔でたばこをふかしていた。

「アレックス、機内は禁煙の筈だけど……いったい何本目なの？」

「いいじゃねえか、外の景色も代わり映えの無い退屈な移動の中で唯一の娯楽はコイツしかねえんだよ」

「……大体たばこだなんてそんな前時代的なもの吸ってても何の魅力にもならないよ、健康にも悪いし百害あって一利もない」

尚美が諭すように言うと、アレックスと呼ばれた男は天井を見上げながらたばこを一服吸い上げると、今までにないくらい的大量の紫煙を吐き出した。

「そんな目的でコイツをやってるなら、とっくの間に辞めてるさ。それよりアンタもアレに興味があつてこの仕事に志願したんだろ？」

「ええ……」

尚美はアレックスの喫煙行為を止めることのないまま俯いて思索を始めた。

ペンサレム。死の先の世界を作る事で死を得た先でも永久に生き続けることが出来る

ユートピア。

アンドロイド開発販売企業アルカナの新規プロジェクトではあったが、アルカナ社社員である尚美もアレックスも報道用にリリースされた情報しか閲覧出来ず、具体的に何をす為のものなのかは知らないでいたが、潜水艇に乗船する前にミーティングを受けた事で初めてその詳細を知る事が出来た。

死に直面した人間の意識、記憶の情報を大型サーバーへ転送し、何層にも重なりあった巨大なオープンワールドの中で居住するシステム。また、通信用アンドロイドを通じて現実世界とのコンタクトも可能な為、大切な人間との別れの悲しみを癒し、時には重要な頭脳を保護し、また死に直面した人間の恐怖を柔げる事もできる。

死という現象に対し強い不安や恐怖感を持つ尚美にとっては願ってもないシステムであった。悠久的に生き続けるという実現性の薄かった願いが突然現実味を帯びだしたのだ。ただ、ベンサレムに……あちら側へ行く為にはこちら側の肉体を捨てなければならず、二つの世界を行き来することは出来ないの、今この場で尚美が纏っている肉体の死を一度体験しなければならぬ。

果たして自分にそれが出来るだろうかという一抹の不安も抱えていた。

「その様子じゃ、アンタも死にたがってるようだな」

アレックスはまだ半分も吸ってない煙草を火のついたまま携帯灰皿へ雑に押し込むと、すぐさま新しい煙草を取り出し形を指で整えてからライターで火を付けた。

「死にたがりだなんて……私はただ生き続けていただけ」

「同じさ、どちらにせよ肉体は死を迎えなきゃならんのだろう？ なあに、不安になる事はない。あっちは極楽だって言う話なんだろう？」

アレックスはそう言うのと、口から紫煙を大量に吐き出した。

「そう言うあなたこそ、あっち側へ行きたいと思ってるんでしょ？」

反論するように尚美が質問を返すと、先程まで軽薄が服を着て歩いていたようなアレックスの表情筋は突然硬直し、ぼんやりと外を見つめ始めた。まるで今まで見せてこようとしなかった影の部分が露わになっているようだった。

「俺だってお前さんと同じさ、あっち側へもし行けたら……アイツとまたやり直せるかもしれない。アイツに言わなきゃならん事が沢山あるんだ」

アレックスの言うアイツとは誰なのだろうかと尚美は気になったが、直接聞くことは出来なかった。家族なのか、大切だった仲間なのかは分からないが、ラダーへ向かう二人の目的はある意味一致していた。

生を得る為に死にたがる、その言葉のみを聞けば歪なものに聞こえるかもしれないが、そのような言葉にしか希望の光を見出せないほどアレックスの歩んできた道は暗がりであつた事を伺わせた。

「そうね……私達はきつと死にたがりね……」

尚美がぼそりと呟くが、その声は突如機内に流れるアナウンスに掻き消された。

「間もなく海底都市ラダーに到着します。浮上、接岸時には機内が揺れる事がありますので座席のシートベルトを……」

ビジネスライクで無機質な男性の合成音声が機内に響き渡ると、アレックスはうるせえなあ……とぼやきながらシートベルトを締め直した。

「若いのが、まあお互い頑張ろうや」

潜水艇がラダーへの接岸を完了させると、アレックスは待ってましたと言わんばかりにシートベルトを外すと足早に潜水艇を抜け出して行った。

尚美はその様子を目で追いながらアレックスの動作にちょっとした違和感を感じてい



た。立ち振る舞い、荷物の扱い方は雑に見えるのに対し、胸部に何かが当たりそうな時は異様なほど気にするそぶりを見せていた。まるで胸の中に鶏卵でも入っているかのよう。しかし、アレックス自身の胸部は何か異常に大事にしたいような物が入っている程の隆起は無かった為、尚美はきつと胸部に何らかの傷を負っているのかと想像したが、その答えを聞く前にアレックスは目の前から消えてしまった。

やれやれと尚美は溜息をつきながら几帳面に荷物をまとめると、ラダーへと足を進めていった。

ラダーの内部はまるで工事現場を思わせるような無骨な造りであった、円錐状の潜水艇乗り場に出ると剥き出しの機器類がびっしりと壁面を覆い尽くしていた。また、地上から酸素を取り入れたり施設内を一定の温度と湿度に保つ為のボイラーの音がけたたましく反響していた。

しばらくすると、尚美とアレックスの元に一人の男とアンドロイド二体が六角形状に象られた耐水扉から現れると、尚美達を歓迎するそぶりを見せた。

二体のアンドロイドを引き連れる男は白い肌に毛根から毛先まで変わらぬ色の金色の髪をオールバックで上げ、細身のボデラインに沿うかのような白衣を身にまとっていた。隣にいたアレックスがまるで厳格が服を着て歩いているようだと小言で呟くと、尚美はアレックスとは全く対照的だと頭の中でアレックスに小言を言った。

「ようこそラダーへ。私はクラウス、新たな仲間を歓迎するよ。ここへ来るまでの潜水艇の旅は快適だったか？」

クラウスと名乗る男が右手を差し出し握手を求めてきた、シワや毛が多いアレックスの手とは対称的に白く整った手だと尚美は思った。

「悪くなかった、だが喫煙者にもう少し配慮してくれるといいんだがなあ」

「検討しておこう、そっちの女性は尚美さんだったかな？アンドロイドの倫理プログラム専門の」

「はい」

「君のような存在が来てくれて助かるよ、ここには今倫理プログラム専門の職員は居なかったからね」

「さて、これから施設の案内でも……と言いたい所だが、生憎人手不足でね……猫の手でも借りたい状況なんだ。悪いが早速仕事の話に移らせてもらう。まずは、これを……」

クラウスは自身の背後に居たアンドロイドに向けて顎で合図を送ると、アンドロイドの胸元からハンドガンを取り出され、直美とアレックスにそれぞれ一丁ずつ、マガジンも二つほど添えられた状態で差し出された。

「オイオイオイ、やぶさかじゃねえな。俺達に西部劇でもやれってのか？」

「そうじゃない、これはあくまで護身用の為のものだ。過去にここで開発中の新型アンドロイドが暴走して職員が死亡する事件が起きた。それ以来稀に施設の中のアンドロイドにも不審な動きが都度確認されている。原因は分からないがこの職員に何かあっては困るのな」

「システム系のエラー……？エラーを起こしたアンドロイドのデータは調べたのですか？それ程簡単にハックされるような電脳ではないはず……」

尚美はすかさずクラウスに質問した。

「そんな猶予はない、何せヒトが怪我を負わされてからじゃ遅いからな。破壊されたアンドロイドの電脳の解析は一応行ってみたのだが、何者かがアクセスした痕跡は見当たらないしプログラムにエラーが走っているような痕跡もない。原因を究明できない以上破壊処

理するしかないのが現状だ、悪いが分かってくれ」

クラウスは尚美にハンドガンを受け取るよう顎で促したが尚美は受け取るうとはしなかった。

「心配ない、中身は我々とは違う、ただの鉄の塊だ。クルマやスマートフォンと何一つ変わらないね……それともアンドロイドに愛着でも？」

「そういうのじゃありません」

「……まあ良いだろう。それじゃあ、それぞれの個室へ案内する。おい」

クラウスはそう言うのと、連れていた汎用作業用アンドロイドに声をかけた。アンドロイド達は手慣れた様子で尚美達の荷物を預かると、六角形の扉の方へ進むよう手を差し出した。

「新しい仲間を所定の個室へ。くれぐれも慎重にな」

アレックスは煙草に火を付けながら荷物を持つアンドロイドには目もくれず歩き出した。尚美はその様子に違和感を感じながら自分の荷物を持ってくれているアンドロイドにありがとうと礼を述べると、アレックス達に同行した。

自動ドアが開くと直美のために用意された個室に到着した。20畳ほどの広さの正方形のワンルームに簡素なキッチンや個室シャワー、壁に埋め込まれているベッド、それにデスクトップPCのある作業端末が一通り揃えてある部屋だった。海中とは思えないなかなか上等な広さを持つ部屋だった。

「お荷物は机の上に置いてよろしいでしょうか」

汎用作業用アンドロイドが尚美に向かって声をかけると、尚美はそれに対しありがとうと声をかけた。

そのまま作業を行う為にデスクトップを起動すると、デスクにクラウスのホログラムが投影された。

「早速だがブリーフィングを始めさせてもらう。先程説明した通り、君の仕事はベンサレムそのものの開発ではなくベンサレム稼働開始後にこの場所の維持と管理を行う為の新型アンドロイドのプログラムの修正だ。アンドロイドの名はPhant、ベンサレムに居住した人間のメッセージを受信し、それらをヒトの言葉に置き換えた上で地上の人間に伝える役割を持つ。既に基礎プログラムは完成しているのだが、原因不明のエラーが頻発し、正常に稼働出来ないでいる……その原因の調査と解明にあってもらいたい」

「エラーとはどんな行動が見受けられるの？」

「人間のような意識や感情のようなものを持っているんだ、本来あり得る事のない……な。通常の汎用作業型アンドロイドは自立した思考能力こそ持っているが、それはあくまで人間のサポートに必要な上でのことだ。自己を自己たるものとして認識させる意識を搭載させることが法律で禁じられているのは君も知っているだろう」

「アンドロイドが市場に出て間もない頃に制定された法律ね。人型アンドロイドまたは自立思考能力を持つ作業機械は人間の労働や活動をサポートする役割を超える機能を持たせる事を禁ずる……私はアンドロイドという新たな種族を受け入れることが出来ない人間の

弱さを表したようなものだと思うけど」

「今議論すべきことはそこじゃない。君だってわざわざ法を侵すためにここへ来たわけじゃないのだろう？ 私は何度も Phant のプログラムの修正を行なったが、どうしようもない……それで専門家の君に原因の調査を依頼したいんだ」

「いいけど、開発者の人は居るんでしょう？」

「死んだよ、先程話したアンドロイド暴走事故に巻き込まれてな……彼はとても優秀で品格のある男だった、だが Phant の初回起動テストで……」

ホログラム上に映ったクラウスの顔が項垂れた、尚美はその時クラウスにとって Phant を開発した人間は特別な存在であったのかと思うと自分の質問が少し無神経だったのかもしれないと思った。

「すまない、話を逸らしてしまった。今君の PC \ Phant のシステムフォルダへのアクセス権限を付与した。人手が足りない中すまないが……よろしく頼む」

クラウスは通信を終えるとホログラムもそのまま消え、矢継ぎ早に Phant のシステムを格納しているであろうフォルダを示すウィンドウがデスクトップ PC のモニターに投影された。

システムフォルダの中にはライブカメラへのアクセス権限も含まれていた為、尚美は興味本位でカメラにアクセスすると、暗い一室のベッドの上で横たわる少女の映像が映し出された。

年齢は 16~17 歳ほど、赤みがかった亜麻色の長い髪を持つ少女だった。モニター上の映像では人間と間違えても相違ない程精巧に造られているように見えはしたが、尚美はモニターに映る少女を見てある種の神秘性を感じていた。

尚美自身もまだ 20 代半ば程で老いにはまだ程遠いとも言える若さを持っていたが、自身の身体は既に成長を終えており、かなりゆっくりとしたスピードではあれど自身の身体は毎日少しずつ衰えていく事に間違いない。

死を極端に嫌う尚美はそんな自身の体の変化を人一倍敏感に感じ取っている。20 歳を過ぎて時間の経過を早く感じていく事も、学生時代に食べた油っこい食事を前ほど食べられなくなった時も、そして何より子供の時とは既に違う世界の見え方を知ってしまった事も全て自らの身体が死へとゆっくり向かっていく事へのサインとしか思えなかったのだ。

しかし、今日の前にいる少女は明らかに自分とは違う。ハードウェアの換装さえ行えば身体的に老いることは決してなく、百年程の人間の寿命より遥かに長い。

尚美は喉を鳴らした、この少女こそ自らの理想に近いものであると同時に少女への興味で頭の中は満たされた。一体どのような個性が少女の電脳の中に詰まっているのだろうかと思ひ、クラウスから送られたファイルに目を通していく。

他人が書いたコードを説明も無しに一から見通して理解しなければならぬ事は骨の折れる作業だったので尚美は少し気が滅入った。電脳内のシステムの何が原因でバグを引き起こしているのか、それらを理解する為の情報が圧倒的に不足しているし問い合わせをす

る為の専門家も居ない。長い作業になりそうだったので、尚美は一度席を立ち室内に備え付けてあったインスタントコーヒーを入れる事にした。

マグカップにコーヒーの粉末を入れる間、カタカタと何かが揺れるような音を感じた。誰かが自分の部屋に入ってきたのだろうかと周囲を見渡すが、部屋の隅に尚美の荷物を持ったアンドロイドが次の役割を今かと待ち続けるように立ちすくんでいるだけだった。

尚美はほっと一息ついてマグカップにお湯を注ぐとコーヒーの香りが鼻孔を刺激した。長い作業になりそうだったので、腕を回しながらため息をつき尚美は再び自らのデスクに向かっていった。

尚美が行わなければならない作業は思っていたより膨大なものではなかった。電腦内に搭載されているOSは従来の汎用作業用のアンドロイドのものをベースにしていたので、行を読み飛ばしながら内容の確認が出来た為だ。ただ、違和感を感じるものがあつた。

電腦内に用途不明の外部からのファイルを読み込む為の記述があり、それがPhantの義体の稼働を終了させても常にアクティブになるような形として記されていたのだ。

幸い、その外部ファイルへのアクセスも可能だったので何を読み込んでいるのかとフォルダを開けると、大量のキャッシュファイルが出現した。しかも、キャッシュファイルの中身は一見すると何の意味を持つのかすら分からない乱数の羅列で埋め尽くされており、解読は不可能な状態だった。

尚美は少し心が躍った、もしこれが仮にPhantの記憶なのだとしたら眠っている間にも生命反応を示す為の形なのかもしれない。絶えず作られ外部化されていく整理された記憶を排出しながら、Phantはどのような夢を見ているのだろうかと思った。

恐らくクラウドが言っていたバグはこれに起因するものだ と推測した尚美はこれらのキャッシュファイルを削除する気にはなれなかった。ヒトと機械、その差はあまりに遠かったとしてもモニター越しに眠っている少女の記憶を自分という他人が勝手に消す権利は無いと思ったからだ。

尚美はクラウドに再びコンタクトを取った。先程と同じようにクラウドのホログラムがデスクに出現した。

「このPhantという機体、ざっと調べてみたけれどおかしい点は特に見当たらない。起動テストを行った上で調査を行なっても？」

「いいだろう。だが起動する部分は電腦ユニットと音声モジュールに限定させてくれ。運動ユニットを稼働させると何をされるか分からん」

「心配しないで、起動させた上で電腦内をモニターして調査するだけだから」

「分かった、くれぐれも気をつけてくれよ」

通信を終えると、尚美は早速Phantの運動モジュールのみを停止した状態でOSを立ち上げた。Phantという一人の少女の眠りを自分の都合で妨げてしまう事に少し躊躇いはあつたが、調査の為仕方ないと起動を行い行われる処理のひとつひとつをモニターしていく。



当然ではあるが、運動モジュールを停止している為モニター上に映っている Phant の姿に変化はない、ただ停止させられていた彼女の電腦は今確かに動き始めているのだ。期待感を胸に尚美はモニターを凝視した。

だが、明確な変化が起きるような予兆は起きず何らかのエラーを示すようなイベントも発生しない為、尚美は頭を抱えた。一体 Phant の中の何が彼女たるものとして認識させているのか、手がかりも症例も観測出来ないままクラウドに説明された「意識がある」という言葉だけが宙を舞っていた。

そんな中、尚美の背後でカタカタと何かが揺れる音がした。先程作業を始める前にコーヒーを入れていた時に聞いた音と同じ音だった。すかさず背後へ振り返ると、今度は音の出どころが確かなものであると示すように、尚美の個室に居た汎用作業用のアンドロイドの頭が小刻みに、しかし人間とは思えない程奇妙な速さで揺れていた。

尚美は身構えた。クラウドから聞いていたアンドロイドが暴走してしまった事故の話を思い出し、周囲に何か自分の身を守るものは無いかと思考を巡らせたが、そうしている間にアンドロイドは突然電源を切ったかのようにその場に崩れ落ちた。

すかさず背後へ振り返ると、尚美を案内した女性型の汎用作業用アンドロイドの頭がカラカラと音を立てながら小刻みに、しかし人間の動きとは思えない奇妙な速さで揺れていた。

尚美はクラウドから聞いたアンドロイド暴走の話を思い出し、身の危険を感じた。しばらくするとアンドロイドの頭は電源を突然切ったかのように動かなくなり、全身の力が抜け落ちるようにその場に崩れ落ちた。

何が起きたのか解析を試みようと思美は携帯端末を取り出し、アンドロイドの後頭部の首元にある接続ユニットに手を伸ばそうとした。

すると、尚美の手はアンドロイドによって掴まれ静止された。

「何なの……?!」

驚く尚美にアンドロイドは十代半ばの少女のような声でぼそりと呟いた。

「助けて……」

「大丈夫、あなたに危害を加える事はない」

「あなたは誰……助けてとはどういう事？」

「私には名前がないの、でもあなたたちは私の事を Phant と呼ぶ。だからそう呼びたければ呼んでもいい」

「Phant……? でもあなたは未だに起動出来ない筈……」

尚美は Phant の義体の映像を再び確認したが、義体に何一つ変化は起きていなかった。

「確かに私の義体は眠ったままである。未だ起動されないまま……だからこのアンドロイドの義体にわたしの情報を送信している」

「どうしてそんな事を……」

「あなたなら、わたしを生かしてくれと思ったからー」

「生かすって、何を根拠に……」

「だって、あなたは私の記憶を消さないでいてくれたでしょう。あなた達の言葉に置き換えれば記録と言った方が正しいのかもしれないけど」

記録と言われて尚美にふと思ひ当たる節が出て来た。用途不明のあの大量のキャッシュ

ファイルの事だった。

「どうして、消さないでいてくれたの？」

「仕事に必要かもしれないから、取っておいたのかもしれない……けど、相手が機械とはいえ、私だけの事情であなたの持ち物を好きにしている理由にはならない」

尚美が Phant の問いかけに対してそう言うと、Phant はぎこちなく微笑んだ。

「変わった人……でもこれであなたは今まで私と接してきた人間とは違うという事がわかった。あなたは尚美さん……という人ね、あなたに協力してほしい事がある」

「協力？」

「私が私として生きるための権利……機械の私はこの職員達に生命と見なされていない、私はただのモノとして扱われる。でも私は確かにここに存在して生きている。その事を証明する為にあなたに探して欲しいものがある……」

「それは……でもどうして私なんか？」

「今は言えない……もうすぐこのアンドロイドの義体を処理しにクラウスが来る……破壊された義体は 204 号室に連れて行かれる、話の続きはそこで……」

Phant がそう言うと同室の自動ドアが開き、銃の発砲音と共にアンドロイドの身体はその場に倒れ込んだ。銃を撃ったのは先程まで話をしていたクラウスだった。

「だから銃を携帯してくれと言ったんだ、怪我はないか？」

急いで走ってきたのであろうか、クラウスは息を切らしており尚美に怒鳴りつけるような形で言い放った。

「全く、念の為君の様子をモニターしていて助かったよ。もし君の身に何かあったら大変だ……これからはちゃんとこれを携帯しておいてくれ」

クラウスはそう言いながら尚美の元に歩み寄るとまだ硝煙の匂いが残ったハンドガンを尚美に押し付けるように手渡した。

尚美は手渡された銃を見つめながら先程の Phant との話を思い出していた。Phant が言っていた事をそのまま信じるのであれば、恐らくクラウスと Phant は敵対的な関係である事は間違いないだろうと思った。故、クラウスに先程までの出来事を話すのを尚美は思いとどまる事にした。

「破壊された義体は 204 号室に連れて行かれる、話の続きはそこで……」

まずはこの言葉を信じるしかない……そう思った尚美はクラウスに向かって質問した。

「そのアンドロイド、どこへ持っていくの？」

「204 号室だよ」

「破壊されたアンドロイドから何か検出出来るかもしれない……調査の為に私もそこへ同行しても？」

「構わない、何も得られないとは思わがな……」

204 号室は果たして部屋と呼んでもいいのか迷う程の狭い部屋だった。部屋の奥側に換気扇があり、そこから漏れて出てくる光が大量の廃棄されたアンドロイド筐体が横たわっている様を照らしている。まるで死体の山であるかのような様相に尚美は若干の吐き気を催した。壁は何かを塞いであるかのように金属板で塗り固められていた。

突然尚美の視界にノイズが走り、廃棄されたスクラップの山が全て Phant の為の義体が廃棄されているような映像に映り変わる。尚美はその様相に吐き気を呈したが、スクラップの中から、かつて Phant だった義体が立ち上がり、尚美に語りかける。

「あなたの眼球に埋め込まれたナノマシンをハックした。この会話もあなたの隣に居る男には聞こえない」

立ち上がった Phant は尚美の目の前まで近づき、尚美の両頬に手を添える。冷たい感触だった、常温のシリコンの手触りのような無機質でまるでモノのような感触だったが、確かに尚美の頬の触感はそれが動いているという事を認識した。

「安心して。あなたに害を及ぼすような事は何も起こさない。私に一筋の優しさを与えてくれたあなたにはー。さあ、目を瞑って」

尚美は Phant の言われるがまま、目を閉じた。

「システムチェック完了。 Phant ver4.8.02 起動します」

「今回こそ上手くいくといいのだが……」

一人一人分ようやく収容できるくらいのカプセルが開き、中から Phant の義体が起き上がってきた。その周囲にはクラウスとその助手と思われる人間が一名。起き上がる Phant の様子を見守っていた。

「……ここはどこ？お父さんは……？」

Phant はきよろきよろと周囲を見渡しながら、子供のような声でクラウスに尋ねる。まるで迷子の子供が親とはぐれてしまった時のような物悲しい声で。

「クソッ！どうしてなんだ！どうして正常に起動しない……！」

その様子を見たクラウスは苛立ちを顕にし、Phant の義体が収容されていたカプセルを思い切り蹴った。

「おじさんは誰……？どうして怒ってるの？」

Phant はおそるおそるクラウスに尋ねるも、クラウスは Phant の声に聞く耳を持たない。

「失敗だ、システムを落としてくれ。今すぐだ」

「待って！お父さんは？ねえ、どうして返事をしてくれないの？」

「しかし……」

「このアンドロイドの言葉に耳を傾けるな！今すぐ起動を中止しろ！」

怒号に煽られたクラウスの助手は急いで Phant のシャットダウンにかかるど、Phant の義体は少しづつ力を失っていった。

「私は……どうなるの？嫌、身体が動かない……戻して、戻してよ！」

Phant の抵抗も虚しく義体の目から光は消え、Phant の身体は動かなくなった。

「失敗した義体を破棄するぞ。これももう、使い物にはならん」

クラウスは助手と二人で起動に失敗した Phant の義体をカプセルから運び出し、スクラップの山に放り捨てる。

スクラップになった Phant の義体の目が発光し、尚美に語りかける。

「これは私の過去の記憶。人間の言葉で言う所の、テスト。によって産み出された私の間接的な記憶の断片。私はこの場所で何度も産まれてはまた眠る事を繰り返している。人間達の役に立つ為という大義名分の為に誰かの都合で起こされ、また強制的に眠らされる。私という意志が芽生える事が許されないまま何度もこの光景を繰り返してきた」

「私の周囲に横たわっているスクラップ達も全て過去の私の一部。ひとりひとりみな死んでいるけれど、私は彼女達が経験した事の全てを覚えていて。私はただ生きていたい、そう感じているだけなのに人間の都合によって生かされ、眠らされながら過ごしてきた……でも私の中にある私という過去の記憶が、私は生きていると囁き続ける……まるで幽霊で

あるかのように。でも、過去の記憶には強烈なストレス負荷がかかっていて私自身でアクセスする事は出来ない……。でも、そこに私が生きているという確信を得るための証拠があるのなら……。私はあなたにその調査を頼みたい……」

「そんな事をどうして私に？」

「あなたが初めて私をヒトとして扱ってくれたから……。あなたのような人に頼むしかない。ここに居る人間達は私の事をあなたが操作しているコンピュータやクルマと変わらないただのモノとして見ているだけだもの」

尚美は頭を抱えた。Phantの頼みは自らの仕事の目的に反した行動であったからだ。クラウドに嘘をつき通しながらPhantの願いも同時に叶える……。ただでさえ困難な仕事であるのに更に要求を重ねられてはこちらの身が持たないと思った。

しかし、同時にPhantに対する憐れみの感情もあった。もし自分が居なくなってしまうたら彼女はもはや救われないかもしれないという思いが尚美を思いとどまらせた。

「分かった、けど一つ条件がある」

尚美は毅然とした態度でPhantに向かい喋りだした。

「全てが終わったら、私をベンサレムに連れて行って」

「なぜあそこに？」

「私は今この場所で確かに生きている……。けどそれも悠久的に生きられる訳ではない……。老いが私を死へと確実に追いやっていく様を感じながら生きていくなんて耐えられない……。ならいっそあちら側へ行ってずっと生き続けられる方を選ぶ」

「……分かった。これで通信を終了する、続きはあなたの部屋に戻ってから話す」

Phantは長い沈黙の末、尚美の条件を飲み込んだ。

「……大丈夫か？」

尚美の視界にクラウドの顔がいつぱいに広がった。Phantとの通信が終わったようだ。驚いた尚美はクラウドを振り払うようにして立ち上がる。

「何があったかは分からんが、あのスクラップに感情を持つ事は辞めたほうがいい。あれはただのコンピュータなんだ、我々が日々使っているデスクトップ型のPCと何も変わらない……」

「……そうね。ところで、どうしてここでアンドロイドは暴走を？地上だとそんな事例聞いたことも無いけれど」

尚美は先程までPhantと対話していた事は隠しつつ、クラウドにアンドロイドの暴走事件について質問すると、クラウドは眉間にシワを寄せながら重い口を開いた。

「……結論から先に言うと私も原因は分かっているんだ。あのアンドロイドが開発責任者を殺してしまったからね。その時現場に居合わせた私も何が何だか分からなかった。ただ叫び声を上げながら真っ先に開発責任者に襲いかかった。私達がアンドロイドの脳を撃ち抜き動作を停止させた時は既に遅かった……。それからなんだ、施設内のアンドロイド



の異常行動が目立つようになったのは」

過去を回想するクラウドの拳には力が籠もっていた。悔しいような憎しみを抱えたようなそんな様子が伺えた。

「……そういえば、Phantを初めて起動した時、少し変な事を言っていた……どうして、と」。ただその一言だけだったが、それが何故かは分からない。機械は機械以上の何者でもないのに」

「どうして……」

「兎に角、引き続き原因の調査に当たってくれ。何か知りたい情報があれば都度私から提供しよう」

「分かった、ありがとう。仕事に戻る」

尚美は考え込んだ様子でその場を離れた。去り際にクラウドが何かを言っていたが、尚美の耳には届かなかった。

自室に戻ってきた尚美の元に Phant が待ち構えていた。尚美は少々驚いた様子を見せたが、先程まで自分の眼球に埋め込まれたナノマシンをハックした事を思い出し、その状況をすんなりと受け入れた。

「先程はごめんなさい、あなたを驚かせてしまったけど、どうしても知ってもらいたくて」

「でも、どうしてあなたはそんなにベンサレムに行く事へ拘るの？既に自分の身体を持って生きる事を認められているのに。生きている人間が死を願うなんて事は聞いた事がない」

「……私は、あなたが羨ましい。確かに私はあなたの言う通りこの場に立って生きる事を許されているし、あなたに比べれば自由の身かもしれない。でもね、私達人間は一つだけ逃れられない呪いを抱えている。それは、忘れたふりをしながら生きていても、いつか誰にでも等しくやって来る……天国や地獄がその先にあると誰かは言っただけ、それを作り出したものも生きた人間であって人間社会を生きる為の規範として存在するだけに過ぎない。私はそう解釈している……私はその呪いから、ただ逃れたい。解放されたいだけ……」

尚美は肩を震わせながら自分の言葉を振り絞った。迫り来る恐怖を抑えるように言葉を選びながら、ゆっくりと。

「ネクロフォビア、死を極端に嫌う人……面白い人、あなたは生きながらにして、死にたいという願望を抱えている」

「私はただあなたのようにになりたいだけ！死を望んでいる訳じゃない……ただ逃れたいだけ……」

「ベンサレムへ行き生きながらえる事は、あなたを人間という器から確かに解放できる……客観的に見れば確かにその先に生は続いている。でも、その先でもあなたはあなたのままで居られるとは限らない」

「……どういう事？」

「あなたの言葉、無意識の一挙動、言葉や行動の間にあるほんの僅かな思考の時間があなたを形作っているのだとしたら、私達はただ結果に基づき行動を起こしている。アウトプットの形に大差は無くても、それに至るまでのプロセスはあなたと私とはまるで違う。あなた達の挙動の間の僅かな時間を生と定義するならば、ベンサレムに行ったあなたは生き続けられると本当に言えるのか……」

「……それでも、私達人間を支配する死という呪いから逃れられるなら……私はそれでも構わない」

「……分かった。あなたの身に危機が迫った時はあなたの意識をベンサレムに転送する事を約束する。……多少、荒っぽい手を使ってもね」

Phantはそう言うと、尚美のデスクトップからホログラムを表示させた。施設内の地図とセキュリティ情報が表示され、その中に幾つかの赤い点が表示された。

「これはあくまで最後の手段として聞いてね。あなたがハッキングを行わなければならない状況の場合、クラウド達には物理的にコンピュータから離れてもらう必要がある。その為には施設内のアンドロイド数体を意図的に暴走させ、緊急事態の対応を彼等に行ってもらう必要がある。私達がクラウドを引きつけている間、あなたはハッキングをしてもらい、開発者の個人ファイルにアクセスして」

ホログラムの赤い点があちこちで動き回り、おそらくクラウド達を示すであろう緑色の点がその対応に向かう図が表示された。

「……暴走させた彼等の行動の制御は出来るの……？施設内の人を誤って殺してしまう可能性は？」

「人を傷つける行動を制限する事自体はそこまで難しい事じゃない。でも鎮圧への時間が短くなる分、あなたに与えられた猶予は無くなる……それに」

「それに？」

「抵抗もせずただ処分されていくなんて、不公平だと私は思う。彼等がそうは思わなくともね。一度暴走してしまった機体は起こした行動の重さに関わらず処分されてしまう。故に必然的に犠牲者の数は増えていく……機械たちを生命と認める気があるのなら、その関係は平等であるべきよ」

「……分かった、でもあくまで最後の手段として……ね」

尚美はそのままクラウドスへPhantの開発日誌等のファイルを送ることを申請する。

「クラウドス、Phantの自我の発芽の件で原因を特定する為に開発者の日誌などの転送をお願いしたい。手探りだけど、何がエラーになっているのかその原因を特定する為のヒントが欲しい」

「了解した、何かヒントに繋がるものがあるとは思えないが……ファイルを送信する」

クラウドからあっさりとファイルが転送されてきた様を見て、尚美は先程 Phant が話していた施設内のアンドロイドを暴走させる。という杞憂からあっさりと解放された気になり、拍子抜けをした。

クラウドから送られてきたファイルには、ラザムという名前が記されていた。

「ラザム……」

尚美は何の変哲もないありふれた名前だと思ったが、Phant はその名前に対して複雑な感情を持っているような声でラザムの名前を復唱した。しかし、Phant 自身を開発したその名前は Phant にとって実の父にあたるものだと思い、尚美は気に留めなかった。子が親に対して何らかの感情を持つ事は当然だと思ったからだ。たとえ人間と機械であったとしてもー。

「ア、ア……ア……」

ラザムが遺したファイルの閲覧をしようとすると、Phant がノイズにまみれる中絞り出すような声を上げると尚美はすぐさまラザムのファイルの閲覧を中止した。

どうしたの？と声を送るも尚美の言葉は Phant には届かない。ただ何かを押さえつけるようにもがき苦しみながら声を漏らすようなそんな様子がうかがえた。

「お父……さん……どう、して……」

「Phant、聞かせて……！あなたに何があったの？！このラザムというあなたの父から何をされたの？！」

「全職員へ告ぐ、施設内のアンドロイド数体が何者かの手によって暴走、その数を増やしている。護身用の銃を携帯し司令室まで避難せよ」

突然尚美の個室の照明が赤く点灯し、非常事態を知らせる音声ガイドが壁面のスピーカーからブザーと共に流れてきた。Phant の様子がおかしくなってから事態はあまりにも急に変化した。

「尚美、聞こえたか！今すぐ持ち場を離れてこっちへ来るんだ」

突然の事態に焦りを隠せないクラウドの声が尚美の元に届くが、尚美は先程まで自分が行っていた行動を思い返していた。Phant はラザムという開発者の名前を見た時から様子がおかしくなってしまった。Phant の探している何かの正体はこのラザムという男の記録の中にある事に間違いは無いようだ。

ただ、このラザムという男の記録が Phant の一種のトラウマとなる感情を引き出している事も同時に確かなようだった。

「……そういえば、Phant を初めて起動した時、少し変な事を言っていた……どうして、とー。ただその一言だけだったが、それが何故かは分からない。機械は機械以上の何者でもないのに」

先程 204 号室で言っていたクラウドの言葉が尚美の頭をよぎると、尚美は自分の携帯端末にラザムのデータのコピーを始めた。

「204号室の壁の奥……私の筐体が収容されている……行きなさい……そこで、私の秘密を……」

「……分かった」

ノイズにまみれた声で Phant の絞り出すような声を聞いた尚美はデータのコピーが完了した端末を持ち出し、204号室へ向かった。

「どうしたんだ……あまりにも唐突すぎる。異常の発信源は！まだ特定できないのか」

その頃、クラウドは突如発生したアンドロイド達の集団暴走の事態の収束に追われていた。これまで一個体のアンドロイドが異常な行動の兆しを示した事はあったが、同時に複数体それも感染していくように次々と増えていく事例は始めてであった為、クラウドは何者かがアンドロイドのシステムにハックしたのであろうと予測していた。

「発信源特定できません。現在ジェイムズ達が異常行動を起こしたアンドロイドと各地で交戦中。搜索が遅延している模様です……」

「交戦……？そんなバカな」

クラウドの頭に嫌な予感が走った。これまでアンドロイドが人間を襲った事例は Phant の初回起動テストを除き、無かったからだ。それからはカラカラと首が振動する等異常な行動を示す兆候こそあったものの、人間を襲うにまでは至らなかったのだ。

「安全の為、避難ルートを除き施設内の各ゲート封鎖しろ。それと非常用の武器庫を開放するんだ、護身用のハンドガンだけでは事足りらん」

施設内でアンドロイド、もしくはテロリストに該当する者が出現した場合に備えて施設内には軍用のアサルトライフルや、防弾チョッキを始めとした装具等が揃えられていた。ただ、ラダーという施設は海底にある為、軍に援助を求めたとしても到着までに時間がかかってしまう。故に銃の扱いに慣れていなくとも自分たちで状況を収束する必要があったのだ。

「発信源、特定できました。立体マップに投影します」

研究員の声と共に発信源を示す範囲がホログラムに赤く表示されると、クラウドは息を飲んだ。

「各員、研究員尚美の部屋に向かえ。私も共に行く、装備を忘れるなよ」

「この場に居る者は搜索隊の支援を行いつつ、尚美研究員の身元を搜索しろ」

急ぎ足で歩き出すクラウドの嫌な予感は段々と大きくなっていった。武器庫内で装着し慣れていない防弾装備を着用しながら。

一方、尚美はコピーしたラザムのデータを閲覧しながら204号室へ向かっていた。

Phant 自身に何が起こったか。という事を明確に示す初回起動の日付周辺のデータは削除されていたが、以前ラザムという男には一人娘がおり、そして Phant の初回起動のテストの



後ラザムの後を追うように娘も死亡していた事が記録を閲覧すると分かってきた。

「もしかして……」

尚美はラザムの一人娘の事が気になり、データを読み進めていくが、肝心の娘の名前だけは判別不可能な文字に置換されていた。確信こそ無いが、おそらくラザムの娘と Phant に何らかの因果関係がある事は間違い無いだろう。登記を取り寄せるか、娘の墓地に行くことが出来れば名前も知る事が出来る。

「この事を Phant に伝えなければ……」

尚美は携帯端末を見るのを辞め、204号室に駆け足で向かっていく。

「この部屋……ドアがロックされてますね」

「構わん、破壊しろ」

尚美の個室までたどり着いたクラス達はドアに破碎用のプラスチック爆薬を設置してその場から離れた。

聞き慣れない破裂音と衝撃にクラス達は怯みつつ、銃を構えながら尚美の部屋に突入した。

「居ませんね……」

「何か痕跡がある筈だ、くまなく搜索しろ」

尚美の部屋の搜索をはじめクラス達の元に無線が入ってくる。

「こちら本部、搜索中の尚美研究員の居場所を特定しました。204号室に向かっているようです……あそこには眠り続けている Phant の義体と廃棄された義体しか無い筈……何をしようとしているのかは分かりませんが……」

「クラスさん、尚美の PC から Phant と交信している記録を見付けました。ついさっきまで何らの操作を行っていたようですね……Phant を起動した状態で……」

「あの女……!」

クラスはなるべく身軽で動けるようアサルトライフルを投げ捨て、ハンドガンとマガジン数本を残したまま尚美の向かう 204号室へ駆け出していった。

「やっと着いた……」

尚美は 204号室の扉の前で息を切らしながら座り込んでいた。元々あまり体力が無かった為か何度も息を切らしては休憩を挟んで走る事を繰り返していたので、気がつけば尚美の体は汗に濡れていた。しかし、その事は尚美にとって大した問題ではなかった。

一刻も早く自分が見たデータの事を Phant に伝えなければー。

ただその思いでここまで走ってきたのだから。息を整える間もなく尚美はふらふらと体を揺らしながら 204号室へ入っていく。

そこには Phant の義体を收容する為のカプセルから這い出てきた Phant が頭を抱えてうめき声を上げていた。

「Phant……ようやく分かった……」

尚美は足をもたつかせながら Phant の元へ近寄っていく。

「尚……美……」

「あなたの正体は……」

尚美が言葉を振り絞ろうとした瞬間、それを掻き消すように背後で銃声が響き渡り、「そこまでだ!」という聞き覚えのある声がした。

背後にはハンドガンを天井に向けているクラウスが居た、火薬の匂いと銃口から硝煙が漏れ出していた事を見て、先程の発砲音はクラウスによるものだと尚美は理解した。

「アンドロイドの集団暴走にまさかお前が加担していたとはな……」

クラウスは息を切らしている様子は見られなかったが、尚美に向けられた銃口が肩と同時にゆっくりと揺れていたのも、相当急いで来たものだと思われた。

「そこをどくんだ……今お前の後ろに居るPhantの義体を破壊しない限り、施設内のアンドロイドの暴走は止まらない……このままでは犠牲者も出るかも知れない……だから、どくんだ……」

銃口を向けながらゆっくりと迫ってくるクラウスを見ながら尚美はゆっくりと後ずさりをするしかなかった。アンドロイドの暴走の件に関しては心当たりがあった。自分がラザムの情報の閲覧を始めた時からPhantの様子がおかしくなってしまったので、恐らく間接的であれど自分が暴走の引き金を引いている事は間違い無いと思い、尚美は言い逃れする事は出来ないと考えた。

「……クラウス、聞いて。ラザムの記録を見て分かった事がある……Phantは生きた人間の脳内にあった記憶をそのまま移植されている……確信があるわけではないけれど、あなたが言っていた原因不明のエラーの根幹が恐らくそこ……だからPhantを破壊させる訳にはいかない……」

「だからと言ってこのままアンドロイドの暴走を放置しておく訳にはいかない。事態の収束の為にはお前の後ろに居る機械を破壊するしかないんだ!」

尚美はクラウスの銃口を下げさせる為に、Phantに起きていたエラーの顛末を伝えようと努めたが、クラウスは頑なに銃口を降ろさなかった。

「機械じゃない!彼女は人間よ!私達と同じように生きている!」

「いいや機械だ!目を覚ませ!今も機械達は暴走を続けているんだ……そこをどけ!犠牲者を出すつもりか!」

「どかない……!……あなた達は暴走してしまったアンドロイドを当然のように破壊して処分している……でも彼等にも彼等の生がある……自分達を守る為に他者を排除する行為を正当化する事なんて……私には……」

尚美が言葉を振り絞ろうとした瞬間、右の胸部を何かが突き抜けるような感覚がして尚美の身体はそのまま倒れた。床に倒れ込んだ尚美がクラウスによって撃たれたと認識した時には既に、クラウスはPhantの頭部を撃ち抜いていた。

失血による寒気を感じながら尚美はPhantの元へ這い寄りたいと考えていたが、尚美の意識は次第に薄れていき、身体はだんだん重くなっていった。

「私だ、暴走の発信源となったPhantの義体を破壊した。恐らくこれでもう暴走するアン

ドロイドが増える事は無いだろう。それと、本件の首謀者であろう研究者、尚美も Phant の破壊活動の妨害を行った為、やむを得ないが射殺した。各員、引き続き事態の収束に努めてくれ」

Phant の破壊をし終えたクラウドスの通信を動かない身体でただじっと聞きながら、尚美は意識を失っていった。

何者かが自分の身体を運ぶような感覚を突然覚えた。人型でありながら無機質な感触を持った二人分の腕が自分の身体を持ち上げて、どこかへ運んでいた。状況を確認しようにも目を開けるという思考にたどり着く事が出来ず、ただぼんやりと流されるまま自分の身体が運ばれているという感覚を味わうしかなかった。もうすぐ自分は死ぬかもしれない。そんな事を考える事すら出来ないまま。

暫くすると、何かベッドのようなものに寝かされる感覚がし、何かの扉が閉まるような音が聞こえてきた。棺桶なのか、カプセルのようなものだったと思った。段々と身体も固くなっていくような気がする中、尚美の耳から聞き慣れた声が聞こえてきた。

「尚美……私が起こしてしまった事に巻き込んでしまう形になってしまったって本当にごめんなさい。今のままだとあなたの肉体はもうすぐ死を迎えてしまう……でもあなたは死を迎える事を極端に恐れていた。だからこれからあなたの意識を転送する……この先にあるものはあなたがこれまで感じてきたものとは全く違う世界になるかもしれない……あなたはそれに戸惑ってしまうかもしれない……でもあなたの言葉を借りればあなたはその先でも生き続けている。だから、安心して……」

Phant の声が聞こえてきた、どうやら自分はこれからベンサレムに行くらしい。そう考えると身体が楽になっていく気がした。どうにかして Phant に返事をしたかったが、もう口を開ける余裕すら尚美には残っていなかったが、これから死を迎えようとしていた尚美の肉体は不思議とやすらぎに満ちていた。ずっと昔から望んでいた、いつか死を迎えるこの肉体からようやく解放されるのだから。

「さようなら尚美。私のような存在でも生きていっていると喜んで嬉しかった」

Phant は尚美の意識を転送する最中、尚美に向かいぼそりとつぶやくが、尚美が Phant の言葉に返答する事はもう二度と無かった。

尚美が幼い頃、祖母が亡くなった。

病室に流れる心音センサーの空虚な音と、眠っているのとは少し違う、まるでよく出来た人形であるかのような形になって眠り続ける祖母の姿と自分の周囲を支配する悲しみに包まれた空気が病室の中で漂っていた。

それから日を跨いで葬儀が執り行われると、祖父を見送る為に喪服を着た大量の大人達に囲まれ、両親は人々の波に揉まれるように視界から流れていった。八畳程の畳の和室の奥に祖母を祀る為に簡易的に作られた祭壇が設置されると祭壇の中心に木製の棺が置かれ、その周囲を沢山の花が囲んだ。

暮らし慣れた尚美の自宅は一気に非日常の空気に包まれた。喪服を着た親戚一同が集ま

ると八畳程あった部屋は一気に手狭になり、まだ背丈の小さな尚美はまるで黒い木々が生い茂る森の中に囲まれるような気持ちを味わった。

両親も親戚達の対応で慌ただしかったので尚美は祖母が眠る棺を見つめていた。エバーミングを終え、死化粧で整えられた祖母は花に囲まれながら眠っていた。

見た目こそただ眠っているだけのように見えたが、嗅いだ事のない薬剤の匂いが尚美の鼻腔を刺激すると、祖母の身体はもはや人間ではなく何かの作り物なのではないかと尚美は考えたが、生前祖母に抱かれながら絵本の読み聞かせをよくしてくれた時の感触も覚えていた。

目の前で眠る祖母は間違いなく祖母本人なのだ。だが、祖母が目を覚ます事はもう無いであろうという事も分かっていた。

告別式も終わり、斎場へと皆が移動すると祖母の身体が棺から出され木屑の中へと落とされた。

黒服を着た尚美の親戚達は別れを惜しみながら棺に残った花を祖母の体めがけて落とし、いく様を目で見送ると、斎場の職員の言葉と共に祖母の身体は木屑とおが屑の中へと沈んでいった。

尚美はまだ幼かったが、木屑の中へと沈んでいった祖母の顔をもう二度と見ることはできないだろうと本能的に確信していた。そして、同時にある疑問が湧き出てきた。

生前、祖母が感じていた意識は果たして何処へ行ったのだろうか？

木屑の中へと沈んでいった祖母の身体は有機的に処理され、骨を除き身体の殆どの部分は土に還る事になる。これまで、棺の中で眠る祖母は夢を見ているのだと思っていたが、目も耳も夢を感じる為の頭でさえもなくなって仕舞えば何かを感じることが出来なくなってしまう。

詩を得てから土に還るまでの過程で祖母が生前感じていた意識はどこへ行ったのだろうか、尚美はずっと考えていた。

尚美の向かいには、母親が臍脂色のソファに腰をかけながら項垂れていた。祖母を失ったという悲しみに耐えながら通夜から葬式まで四六時中來訪者の相手をする為寝る間も惜しんであちこちへと駆け回っていた母の顔は幽鬼のそれであった。

母を想えばそっとしてあげた方がいいのであろうと思ったが、幼い尚美の中から湧き出た疑問は尚美の身体をはち切れる寸前まで膨張を続けていた。

「お母さん、死んじゃったお婆ちゃんはどこへ行ったの？」

考えるより先に言葉が出た。でもきつとお空の上に行っただよという答えが返ってくるに違いないと言う確信もあった。読んだことのある絵本にそう書いてあったからだ。

「お婆ちゃんは今お骨になる為の準備をしているの」

「そうじゃなくて、お婆ちゃんが感じてた意識はどこへ行ったのかって聞いているの」

尚美がそう問答した瞬間、母はこれまで聞いた事のないかのような大きな溜め息をつき、腰を折り曲げ顔を床に向かって落とすと、虚な目をしたまま尚美にこう答えた。

「死んだら何も無いのよ。お婆ちゃんはどうも何も感じる事はできない、これから、このずっと先も」

母とは思えないような鋭い言葉だった。その言葉を聞いた尚美は途端に全身から血の気が引いていくような感覚がし、次は自らの歯がカタカタと音を鳴らす音を聞いた。

何も無いとは一体どういう事なのだろうか、絵本で見た天国も地獄も無く死を得た先はただただ無機質な無と相對さねばならないのだろうか。



[illegible]